

木村崇さんを偲ぶ

岩下明裕 (JCBS 副理事長)

「二人は親友だったんですね」。私が 2015 年 9 月に主宰したボーダーツーリズム、「サハリン国境紀行」北緯 50 度線ツアーに参加した直後、スラブ・ユーラシア研究センターの同僚でもあった大須賀美香さんが私にむけた言葉だ。



北緯 50 度線の国境標石跡でポーズをとる木村崇さん

「親友?」。私がいつもため口で話していたからそう映ったのだろう。でも木村崇さんは私より 20 近く年長。ロシア文学や文化論の大家、ライオン丸のような風貌で知られ、声の大きさとパワフルな姿は学界でもオーラを放っていた。2024 年 4 月 27 日、その木村崇さんが亡くなった。享年 81 歳。7 年ほど前から、呼吸器疾患を患っておられたが、それでも元気な姿を見せておられた。もう一度、会いたかった。無念である。

I

1944 年 6 月 11 日、旧満州・黒龍江省勃利で生まれた木村崇さんは北海道にルーツをもつ。青森の田舎館村生まれの父親が縁あって旭川で結婚。家族ともども旧満州に移住するも、父親は日本の敗戦直前にフィリピンのルソン島で戦死する。崇さんはあわや中国残留孤児となりかけるも、母親と旭川に無事帰国する。戦前日本や中国侵略に対する崇さんの「忸怩たる思い」は幼少期の経験によるものと思われる。

秀才だったのだろう。東北大学に合格。だが敗戦国日本の価値転換を体験し、鬱屈していた崇さんにとって、大学の授業は物足りなかったようだ。新しい何かを探していたのかもしれない。学費や生活費無料（おそらく奨学金もあったはず）で、ソ連のモスクワ民族友好大学（ルムンバ大学）が留学生を募集していることを知り、これに応募。東北大学を中退して、

モスクワ暮らしを始める。当時、ソ連は第3世界を含む諸外国から優秀な学生を集め、共産主義を広めようとしていた。クリティカルな崇さんが、共産主義に魅せられることはなかったが、ロシアの文学や文化に魅せられたようだ。卒論は、ロシア革命後に教育人民委員（大臣）になったルナチャルスキーの文学論。この話を聞いた私は、なんとユニークな組み合わせだと一緒に笑った。

帰国後、ロシア語が堪能になった崇さん。だがロシアの大学卒業資格が日本で認められるはずもなく、あくまで中退扱い。そこで周りの助言を受け、東京外語大学に入り、修士号をとる。1971年、課程終了と同時に、中京大学に就職。ここから研究者としてのキャリアが始まる。

1989年から京都大学教養部に呼ばれ、改組された総合人間学部の教授となる。2008年まで務め上げ、以後、京都大学名誉教授となる。

II

私が崇さんと初めてあったのは、彼が京大でばりばりの頃だった。西日本地区ソ連東欧史研究者集会なるイベントが毎年あり、これは九州（福岡）、中国（広島）、関西のそれぞれの研究会の交流企画なのだが、関西チームのボス格の一人が崇さんであった。当時、まだ若かった私には近寄り難い大先生。セミナーなどでの縦横無尽のロシア語通訳ぶりがカッコいい。それから国家や政治に対するクリティカルな議論。（怖いので）ちょっと遠くから先生を憧れの眼差しで眺め続けてきた。

先生とたぶんまともに話したのも、この集会の宴席だったろう。2001年秋から北大スラブ研究センター（当時）に移ることが決まっており、この春にみなさんに挨拶をしながら酌をしまわった。みな驚いていたが、木村先生だけはにやっと笑っていった、「俺は知っている」。そう先生はセンターの運営委員でもあり、人事情報をいち早くご存じであった。

センターに移ってからは、しばしばお話をする機会が増えたが、それでも知り合い以上のつきあいではなかった。先生と友達になるきっかけとなったのは、つれあい黒岩幸子さんの存在が大きい。

黒岩幸子さんは、ビザなしなどの通訳をされており、日露のいまの関係を専門とする研究者だった。だが最初にどこか（たぶん、札幌）でお会いしたとき以来、その美貌とあわせて、腕を組み相手を睥睨するその姿に威圧され、これまた近寄り難い存在として距離を置き続けてきた。とはいえ、専門が近いから、（嫌でも）おつきあいしなければならない。距離が縮まらないよう、細心の注意を払いながら、交流を（たまに）続けていた。

そのお2人が結婚したと聞いて驚いた。木村先生は、鼻の下をのぼして、ニヤケ顔。黒岩さんに至っては、これがまあ同じ人間かというほど、人当たりがよく、やさしき満開。こんななに人って変わるのね、愛の力は偉大だなどと思いつつ、お2人との距離があつというまに近くなっていった。



愛の力を見せつけ最初の中露国境ツアー（ウラジオストク、2016年）

III

崇さんとのつきあいが根本的に変わったのが、沖縄での邂逅である。2009年、私はグローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」を立ち上げ、日本の境界地域ネットワークづくり、とくに国境離島の研究を手掛けていた。その第一弾として、沖縄本島でセミナーを組織。そこに木村夫妻が参加。え、ロシア研究者が島に興味があるの？とまずびっくりした。たまたま、研究チームのひとりでもあり、日本の島嶼研究に詳しい山上博信さん（後にNPO法人国境地域研究センター理事）と大東島に行く話をしており、その夜に（那覇にある）島の店に行くことにしていた。木村ご夫妻もお誘いすると、そこに吉沢直美さんという「南大東島観光大使」も合流。この出会いが崇さんと私の「友情」を育むきっかけとなった。

大東島は英語名ボロジノ・アイランドという。ボロジノ娘なるネーネーズもおり、「ボロジノ・アイランド」という唄もある。ロシア研究者にとって「ボロジノ」は誰もが知る場所。ナポレオンの進軍に対し、ロシア側が本当に勝ったかどうかは議論の余地があるものの、激戦の地として知られている。崇さんは「島」に行きたいと言った。大陸ばかりみてきた研究者にとって、海に囲まれた小さな陸地は、未知の世界で興味深々だったに違いない。



南大東島・点描（2010年）



当時は NPO をつくるなど想像だにしなかった・・・(左から 3 人目が山上さん)

2010 年まず私たちは南大東島を訪問。崇さんはその後、吉沢大使や山上さんとボロジノに向かい、村長らに表敬までする。ペテルブルグに残って文献調査。そしてついにボロジノという名前が大東島に付いた経緯を解明し、歴史学者のような論文まで発表した。

* 『北海道新聞』 2010 年 10 月 20 日、21 日付 (夕刊)

<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/BorderStudies/essays/topics/pdf/20101020s.pdf>

「境界なき空間：時代的事象としてのボロジノ」『境界研究』2 号 (2011 年)

<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/61270/1/01Kimura.pdf>

IV

そこから崇さんと私は「義兄弟」のつきあいになったと思う。2011年に境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) を設立した際、最初のセミナーを開催した稚内。そこからサハリンへとフェリーで向かう。自治体関係者や研究者、ジャーナリストによるツアーで国境を越え、ユジノサハリンスクでもセミナーを開催した。与那国町長、対馬市長、小笠原副村長などそうそうたる顔ぶれとともに崇さんもいた。

セミナーは無事終わったが、閉会とともに私たちの多くが拘束されることになった。通訳から順番に取り調べ。観光ビザでセミナーを開いたのが、ビザの目的外使用とみなされたのがその理由だった。私はセミナーはあくまで観光の一環として行ったものであり、ビザの目的外使用にはあたらないと抗弁をつづけた。結局、当局の責任者と2時間ほどかけあった結果、解放されたが、会場に残された仲間たちはとても心配していた。

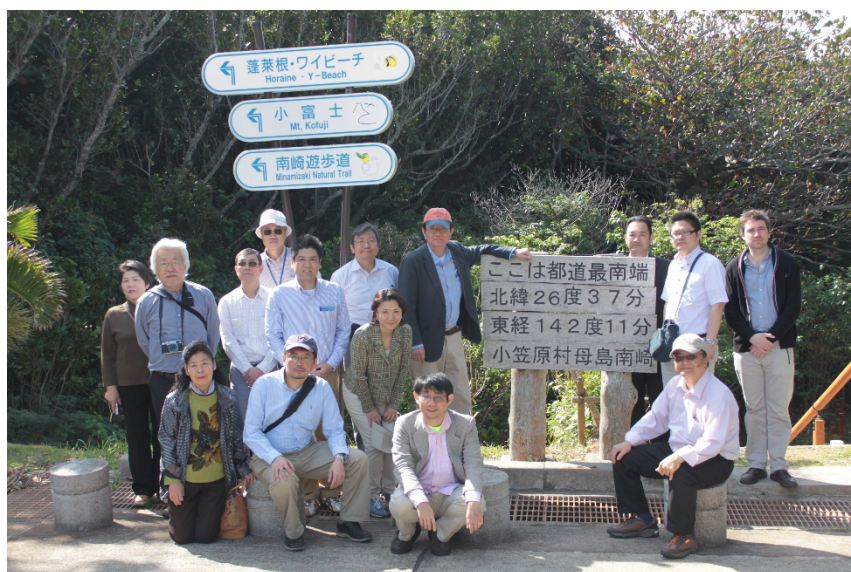
そのとき崇さんに、私たちが戻るまでの宴席を託したのだが、彼が拘束されなかったのは、業務のマルチビザを持っていたからだ。またターゲットは日本人の観光ビザ所有者のみに限られており、英国人の参加者は最初から見向きもされなかった。まあ、いやがらせだったのだろう。

だがこの一件により、JIBSNの団結は高まり、このとき若かった自治体参加者もいまではいい思い出として語ってくれる。崇さんの存在のありがたさをこのとき本当に身をもって知った。

以後、崇さんは私の「兄貴分」となった。冒頭のサハリン北緯50度線、旧日露国境をみるツアーを皮切りに、与那国や小笠原もご一緒した。小笠原では夫婦喧嘩に巻き込まれ、夜遅くまでお2人に無理やりつきあわされたのも、今ではいい思い出となっている。



与那国セミナーで踊る崇さん（2011年）



小笠原にて (2012年)

2013年、NPO 法人国境地域研究センター (JCBS) を立ち上げる際、崇さんと幸子さんをお誘いしたのも自然な流れとなった。同じセンターの理事を務める (旧ソ連関係の専門旅行社) エムオーツーリストの濱桜子さんとの企画で、2016年から中露国境ツアーを開始。これこそ崇さんのロシアに関する教養と語学力なくしては考えられないコンテンツであった。2016年にハルビン、綏芬河からウラジオストク、2017年にはハバロフスクから (中露で分割した) ヘイシャーズ島、アムール川対岸の撫遠、2018年は黒河からブラゴベシチェンスク、(義和団事件の際、中国人が虐殺された) 六十四屯、アイグンを廻るディープな旅たび。ボーダーツーリズムはこうして衆目を集めていく。そして最後となった2019年の満州里、ザバイカリスクの中露国境、モンゴル平原の旅。旅のグループの中心にはいつも崇さんがいた。一日の旅のあと夕食では、ビール、ウォッカ、白酒などを片手に崇さんの大きな笑い声が響き、みな楽しそうにいつまでも話を弾ませていた。



宴席ではいつも人気者 (綏芬河 2016年)



ブラゴベシチェンスクでも (2018年)



中露国境のまち・綏芬河の国門（2016年）



対馬・釜山ツアーも参加（2017年）



大須賀美香さんと大連にて（2018年）

V

崇さんが、2019年から国境地域研究センターの2代目理事長になったのも自然な流れであった。折からコロナに突入。人目をさげ、こそっと新幹線で盛岡のご自宅に伺い、幸子さんをいれた3人で年次総会をやったのがいまも懐かしい。幸子さんの大学退職に伴い、崇さんたちは札幌に来るプランもあった。眼の検査で札幌にもしばしば来られる機会があり、札幌でもよく一緒に飲んだものだ。だが幸子さんが京都の大学に招請されたこともあり、大津を新たな住処とされる。

いつごろからか、呼吸器疾患がひどくなり、崇さんは酸素濃縮装置を背負うようになった。簡単に飛行機に乗れないから、崇さんともう中露国境ツアーには行けないと覚悟した。コロナ禍で実現しなかった2020年に計画していた北朝鮮と中露三国国境ツアーが心残りであ

った。

それでも崇さんは、国境地域研究センターの名古屋での集会に顔を出されるなど、タフぶりを示されていた。2年前に、大津のご自宅へもお邪魔した。盛岡のときのように豪快に一緒に深酒はできなかつたものの、楽しいひとときを過ごすことができた。

まだ当分元気だろう。バイタリティの塊である崇さんがそう簡単に逝くはずはない。そう私は思い込んでいた。そろそろ会いにいこうと思っていた矢先のこと。いま、とてつもなく哀しい。

でも崇さんも、最後私たちと巡り会って愉快的晩年だったと私は思う。いまの政治状況ではいつになるかまったくわからないけれど、次に中露国境に行ける時が来たら、写真を持っていくよ。もちろん、私に崇さんの役割は到底できないけれど。

これまでありがとうございました。

* 木村崇さんのボーダーツアーのサハリン国境紀行、中露国境紀行（全4回）エッセイはJCBSのサイトで読めます。<http://www.borderlands.or.jp/essay/essay.html>

* 追悼文は筆者の個人的な責任において書かれたものであり、文中の写真などに、万が一、不都合のある方がおられたら、著者までご一報ください。akotaro@msi.biglobe.ne.jp

崇さんと行った中露国境ツアーを振り返る（2016～2019年）



アムール川、かつての係争の島ヘイシャーズにも上陸（2017年）



アムール川をブラゴベシチェンスクから黒河に渡る（2018年）



黒河で毛沢東とレーニンともに



最後のツアーとなった内モンゴルの中露国境紀行（2019年）



ザバイカリスクで地元メディア・インタビュー



記念公園でのツーショット